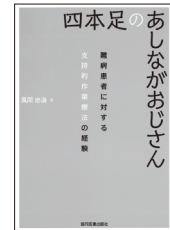


風間忠道 (著)

四本足のあしながおじさん 難病患者に対する支持的作業療法の経験

本 間 武 蔵

(東京都立神経病院, 作業療法士)



この本は、OT である著者が自らを「四本足のあしながおじさん」と形容し、一般的な読者に対して語りかけようとするものかと思ってページを開いた。しかしながら読み進めていくと、実は OT が OT や学生に向かって、さまざまなメッセージを投げかけている、そのひたむきさと懸命さの人生をかけた記録であることがわかる。どのエピソードも、さらっと読めそうで、いや読めない。場面や状況が目につかび出すと、まるで臨床の一場面一場面を連続ドラマのひとこまを見るように没入してしまうからである。

先輩の (OT 資格制度草創期の) OT に凄い人がいるということは、時折耳にすることもあるし、実際にお目にかかったこともある。しかし著者はそのような凄さは微塵も感じさせずに、自分の人生で得た結晶を後世で発芽すべく、種としてまとめあげたのが本書である。その種子は、患者さんたちとの共同作業でできている。まさしく実践の中で編み出されたものなのである。

3つの章で構成される本書の第3章には、患者さんたちのエピソードが綴られているが、まず最初にこの第3章「感想文集『支持的作業療法を受けてみて』」を読

んでいただくことをお勧めする。そこで患者さんの言葉として平易な言葉で作業療法や OT について語られていることが、その前の2つの章を読むと背景に著者の感性と経験によって培われた大いなる意図がさりげなく、しかも実によく計算されて働いているのがわかり、再び第3章を読んでみるとそこに OT の意図が読み取れるようになる。

支持的作業療法という平易な言葉を用い、作業療法の技法として語っているが、本書は著者が、天才的な感性で人の望みや希望を根底から感じ取って、優しいまなざしで共に歩みながら、実現していく数々のドキュメンタリーを綴ったものである。

憎い相手への恨みを晴らすための手伝いや、若い看護師のお尻を触るための自助具をつくる等、一見なんでもありかのようなエピソードが綴られているが、そこには著者の計算がちゃんと働いているのが行間からうかがえる。

人が人を支援することの天才、それもさりげなく自然に効果的に、著者は一体、努力によって計算された支援を提供しているのだろうか、それとも生来の天才肌なのであろうか。思わず著者の生まれ育ちにまで、本書を読み終わっ

た私の興味が広がっていることに気がついた。

一方で、現在の作業療法やりハのあり方にも警鐘を鳴らしている。私は、自分の行っている作業療法の実施時間の中から関節可動域訓練を差し引いて何が残っているか、そこに作業療法といえるものがあるかどうかを、自分に対して点検することがある。この点に関して、著者は、現在の作業療法が機能訓練の割合が多くなりすぎていることに対して嘆き、そしてこれでいいのだろうかという危機感、何とか再び人が人を支援するということの原点に立ち返って、そのエッセンスを日々の機能訓練の中にも反映させられないか、という切り口からも支持的作業療法の必要性を説いている。

この本を読むことで、作業療法について書かれたすべての本や文献に血が通い、人間 OT の姿がそこに感じられるようになる。そして何より読んでいる自分自身が支持的作業療法を受けている気分になる。さらに、それを自分の対象者の方に自分も臨床家として実践したい気持ちになる、本書はそんな素敵な本である。

四六判 200 頁 1,600 円 + 税
協同医書出版社 刊
☎ 03-3818-2361